

## <欧米の日本研究>14 欧米の日本研究と問題点

著者	寺澤 行忠
雑誌名	世界の日本研究
巻	2017
ページ	160-172
発行年	2017-05-30
特集号タイトル	国際的視野からの日本研究 : Japanese Studies from International Perspectives
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00006654">http://doi.org/10.15055/00006654</a>

## 14 欧米の日本研究と問題点

寺澤行忠

### はじめに

私はもともと日本文学を専門とする者であるが、約30年来取り組んできた研究テーマが10年ほど前に大きな区切りがついた。そこでかねて強い関心を持っていた「海外における日本文化受容の研究」というテーマで、2005年に1年間のサバティカルを得て、アメリカを中心にヨーロッパ、中国などを調査することが出来た。しかし地域を広げていくだけでは研究上収拾がつかないところから、その後は国ごとにまとめていくこととし、アメリカやドイツに重点を置いて研究を進めている<sup>1</sup>。

私の研究対象は日本学、日本語教育、日本語図書、俳句、禅、日本美術、日本庭園、茶道、華道、能、狂言、歌舞伎、文楽、アニメ、マンガ、食文化、太鼓など、日本文化といわれるもの全般にわたる。なかでも日本学には最も多くの時間を充て、できるだけ多くの研究者と懇談することを心がけた。

ただ限られた時間で、2008年に定年を迎えて以後には研究助成がまったく得られない状況の中での個人研究であり、文字通りの管見であることをあらかじめお断りして、お許しをいただきたい。

### 1. 海外の日本研究

国際交流基金がハワイ大学のパトリシア・スタインホフ教授に依頼して実施した調査によれば<sup>2</sup>、アメリカにおける2012年現在の日本研究者は1,434人である。また2015年の国際交流基金の調査によれば、イギリスの大学の日本研究者は198人であり<sup>3</sup>、国際日本文化研究センターの統計データでは、他のヨーロッパにおける日本研究者はフランスが269人、ドイツ201人、ロシア100人、イタリア85人、スペイン32人などとなっている<sup>4</sup>。これらの欧米諸国に他の地域を加えると、世

1 寺澤行忠『アメリカに渡った日本文化』淡交社、2013年。

2 Patricia G. Steinhoff, ed., *Directory of Japan Specialists and Japanese Studies Institutions In the United States* (Tokyo: Japan Foundation, 2013), 23.

3 *Japan Foundation Japanese Studies Survey 2015: A Survey of Japanese Studies at the University Level in the UK* (London: Japan Foundation, 2016), 17.

4 <http://db.nichibun.ac.jp/ja/category/kikan.html>.

界全体では数千人の人々が日本研究に従事している。

ドイツなどでは、財政上の理由で、近隣の大学の日本研究を統合するという州政府の方針で、ゲッティンゲン大学、マールブルク大学、エアランゲン＝ニュルンベルク大学、ヴュルツブルク大学等で日本研究が廃止された。ただ一方で日本学専攻の学生や研究者が増えている大学もあり、ドイツ全体でみると日本学が縮小しているわけではない。

日本研究者はそれぞれの国にあって、日本に対する的確な判断を下す中核となる存在であるから、きわめて重要な存在なのである。それに日本を研究対象に選ぶ人々の多くは日本に愛着、愛情を持ってくれる。その国の政治や世論の形成に影響を及ぼすことが期待できる「知日派」の養成は、日本にとってきわめて重要なことである。総合商社「双日」のワシントン支社長であった多田幸雄氏は、知日派養成のための非営利団体The Center for Professional Exchange（略称CEPEX）を2005年にアメリカで立ち上げた。学生がせっかく大学で日本学を学んでも、それが活かせる分野に就職できない、という現実を打破するために、これらの人々の就職支援をしてきている。出口に不安があれば、日本学を目指す人材が枯渇してしまう恐れがあるからである。このような問題は、いずれの国においても深刻な問題で、海外における日本研究振興のためにも、日本の各界において真剣に取り組むべき課題であろう。

研究教育の分野では特に、外部からの資金提供の効果は大きい。日本政府はアメリカにおける日本研究を支援するために、1973年に国際交流基金を通じて、総額1,000万ドルを提供した。これは日本研究のプログラムを持つ10の大学に100万ドルずつ配分された。すなわちハーバード、イェール、コロンビア、プリンストン、ミシガン、シカゴ、ワシントン、カリフォルニア（バークレー校）、スタンフォード、ハワイの各大学である。使い方は各大学の裁量に任せられた。田中角栄首相の時代であったから、アメリカの大学では、俗に「タナカ・テン」と呼ばれている。この効果は大きかった。現在でもアメリカにおける日本研究の中核を担うのは、これらの大学である。

カリフォルニア大学ロサンゼルス校の日本研究センターは「PAUL I. AND HISAKO TERASAKI」の名を冠するが、これは臓器移植のエキスパートとして知られるポール・テラサキ名誉教授夫妻が同大学の日本研究を支援するために、500万ドルを寄贈したことによる。同教授はライフサイエンス学部にも、大学開設以来最も高額である5,000万ドルを寄付している。アメリカではトヨタ財団も、研究・教育部門に力を入れて助成している。

中国では、1979年に当時の大平正芳首相が北京を訪問した際、中国側からの要請で、日本語教育の支援を約束した。中国全体の日本語教員600人に対し、各年度120人、5年で600人を再教育するというプログラムで、ODA援助のかたちで5年間に10億円が投じられた。日本から講師を派遣し、教材や図書も提供された。この「日本語研修センター」は、のちに大平首相に敬意を表して「大平学校」と呼ばれるようになった。

その後日本語研修だけでなく、日本語と日本研究の大学院修士課程が加わり、「大平学校」を継承発展させたのが、現在の北京外国語大学「北京日本学研究中心」である。現在は博士課程も設置され、その卒業生は2016年2月現在で、修士学位取得者638人、博士学位取得者46人に上っている<sup>5</sup>。これらの卒業生が、中国における日本語教育と日本研究の中核的人材となっている。

日本では日本文学、日本史学、日本美術史など諸学は、研究者の数が多から細かく専門が分かれているが、海外にあっては当然のことながら担当者が少なく、日本文学や日本史の全分野を一人で教えなければならないことが多い。また日本では、日本の専門家が同時にアジアの専門家でもあることは少ないであろうが、海外にあっては東アジア、すなわち日本、韓国、中国など広域を研究対象としている研究者は珍しくない。エドウィン・ライシャワーなどはその典型である。

日本研究者も時代とともに少しずつ変化している<sup>6</sup>。アメリカにおける第一世代は、戦前の研究者である。エドウィン・ライシャワーやオーティス・ケーリなど、日本で生れ育った人々で、日本に深い愛着を持ち、東アジア全体の広い視野を持っていた。第二世代はドナルド・キーン、エドワード・サイデンステッカーなど、太平洋戦争中に陸軍日本語学校や海軍日本語学校で、日本語の訓練を受けた人々である。これらの人々が、戦後の日本研究をリードした。第三世代は、ジェラルド・カーティスなど、日本を冷静に、客観的に真正面から見据えようとする人々である。第四世代は、チャルマーズ・ジョンソンなど、日本をより懐疑的、批判的にみる傾向のある人々である。いわゆるリビジョニスト（日本異質論者、日本見直し論者）などもこの世代である。第五世代は、日本のシステムはなぜうまく機能しないのか、といった悲観的な視点から、日本を見ようとする傾向がある。

5 国際交流基金WEB「北京日本学研究中心事業概要」を参照。[https://www.jpff.go.jp/j/project/intel/study/support/bj/details\\_text.html](https://www.jpff.go.jp/j/project/intel/study/support/bj/details_text.html)

6 第一～第三世代については、朝日新聞社編『日本とアメリカ』朝日新聞社、1971年。第四、第五世代については、ジェラルド・カーティス『政治と秋刀魚——日本と暮らして四五年』日経BP社、2008年。

アメリカの場合は、日本研究はさまざまな学問分野で行われているが、ドイツにおける日本研究は、文学も歴史も宗教も、さらには政治や経済も、すべて日本学科の枠の中に統合され、その中でしか行われていないという特徴がある。その結果、近隣の研究とのつながりが失われ、孤立した様相を深めていることが、いま問題となっている。

またドイツでは、日本研究はもともと文学、それも文献中心の学問として行われてきた。しかし日本が戦後急速な復興を遂げ、アメリカに次ぐ世界第二の経済力をつけてくるにつれ、ドイツ政府からその理由や背景の説明を求められるようになった。そうした事情もあり、日本研究は文学・歴史・思想研究よりも経済・政治研究の方向へ、また古典よりも現代という、より現実的な方向を志向するよう変ってきている。

## 2. 特色ある施設と講義と交流

コロンビア大学のバーバラ・ルーシュ名誉教授は、同大学中世日本研究所の所長であった。同名の中世日本研究所が京都にもある。同研究所は、日本の宗教史における女性の役割を研究の大きな柱に据え、近年は各方面から寄付金を募り、日本の尼僧寺院の保存修復運動に熱心に取り組んでいる。また雅楽に魅せられ、10年ほど前にコロンビア大学に、正規のカリキュラムとして雅楽プログラムを立ち上げた。神戸大学から寺内直子教授を招いて、雅楽の講義や実技の指導を受け、将来優れた雅楽の演奏家を育てたいという。

イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校には、日本文化を教えていた佐藤昌三名誉教授の尽力で、キャンパス内に日本館が建設されている。かなり広い日本庭園を持っている。大学の理解の下、万博資金、裏千家、国際交流基金、篤志家の寄付などの資金によってつくられたもので、日本文化に関する講義やさまざまなイベントが催され、日本文化紹介の拠点となっている。大学内にこれだけ大きな日本文化関連施設を持つところは、他にほとんどない。

ロサンゼルスのカウンティ美術館の日本美術館は、ジョー・ブライス夫妻の寄贈と、その呼び掛けで日米の財界が協力して資金を出してつくられたものである。ブライスは既成の価値観にとらわれず、自分の観察眼と感性だけを頼りに、若冲がほとんど注目されていなかった時代に、若冲を中心とした江戸時代の個性的な画家の作品を大量に購入した。そして日本での展覧会には自らのコレクションを惜しみなく提供した。現在の日本における若冲ブームは、このブライスの鑑識眼によってもたらされたところが大きいといつてよい。

ドイツのデュッセルドルフにある恵光日本文化センターも、日本文化紹介の拠点の一つである。このセンターは、仏教伝道協会や（株）ミットヨの創業者、故沼田恵範によって1993年に設立されたもので、広大な敷地に恵光寺、日本庭園、茶室もある日本家屋、幼稚園、図書館などがあり、ここでさまざまな文化活動や行事が行われている。伝道よりも文化活動、文化交流が中心で、民間の施設ではあるが、デュッセルドルフにおける日本文化センターの役割を果たしている。元東北大学教授の青山隆夫館長以下、数名の専任研究者によって研究活動も行われている。図書館には仏教、歴史、美術、音楽、文学、哲学など6万点以上の図書があり、一般にも開放されている

ドイツのハイデルベルク大学通訳研究所には、2009年に同大学日本学科と提携して、世界初の日独会議通訳修士課程が開設された。世界でもトップクラスの会議通訳者の養成を目指している。

アメリカではフルブライト交流事業が長い歴史を持っている。これはフルブライト上院議員の発意から1946年に始まったもので、相互理解に貢献できるリーダーの養成を目的とする専門家、学者、大学院生の交流計画である。世界各国を対象としているが、日本からはすでに約6,400人がアメリカへ、アメリカからは約2,600人が日本へ、この制度で相互に留学した<sup>7</sup>。そして参加者の多くが、帰国後にアメリカに強い親近感を抱くようになったことは、注目に値する。

日本のジェット・プログラム（The Japan Exchange and Teaching Programme : JET）も相互理解に大きな役割を果たしている。これは日本政府の方針でつくられたもので、世界各国から大学を卒業した若者を招き、日本の小中高校の外国語指導助手、地域において国際交流活動に従事する国際交流員、地域のスポーツを通じた国際交流活動に従事するスポーツ国際交流員などとして勤務してもらう制度である。この制度は1987年に開始され、当初4か国、英語圏の848名から始まったが、2002年度には40か国6,273人になり、ピークに達した。累計では2016年現在、参加者は65か国、のべ6万4千人を超える。語種も英・仏・独・中国語・韓国語・ロシア語に拡大し、世界でも最大規模の国際交流プロジェクトである<sup>8</sup>。

### 3. 海外の教育制度

ヨーロッパでは、学制は国によってさまざまであったが、1999年にヨーロッパの29か国の教育大臣が署名して出されたボローニャ宣言で、ヨーロッパの高

7 日米教育委員会（フルブライト・ジャパン）WEB「フルブライト交流事業」

8 一般財団法人自治体国際化協会（CLAIR）WEB「JET Programme」

等教育制度を統一することが決められた。すなわち2010年までに、学修プロセスを学士課程（Bachelor）と修士課程（Master）の2段階にして、ヨーロッパ全体が同じ基準でこれらの学位を出すことになったのである。たとえばドイツの大学は、従来大学の学部と大学院が分かれておらず、すべて大学院修士までは修学する必要があった。これが新制度により、学部卒で社会に出ることが可能になった。学士課程はふつう3年だが、日本学コースでは4年とする大学もある。日本語を習得した上で、3年間で日本学を学ぶのは苦しいからである。

ドイツでは大学教授になるためには、原則として博士号を取得した後で、博士論文以上の論文を書き、「ハビリタツィオン（Habilitation）」と呼ばれる大学教授資格を得なければならない。したがって博士号を取得することは、大学教授になるための基礎資格として重要である。ドイツのトリア大学日本学科は1985年に設立されたが、その20周年記念式典の際に、トリア大で博士号を取得した日本の若い女性研究者に、博士号を持たない駐ドイツ日本大使より上席が用意されたという。ドイツではそれほど博士号が意味を持つのである。

女性研究者の割合は、概してアジアより西欧の方が高い。内閣府男女共同参画局が公表している2015年度現在の統計によると、世界で最も女性研究者の割合が高いのは、ポルトガルの45.4%で、イギリスは38.1%、イタリア35.7%、アメリカ34.3%、ドイツ28.0%、フランス25.5%、日本14.7%であり、日本は欧米諸国よりもかなり低い<sup>9</sup>。日本の女性研究者の割合は1992年には4.9%であったから、年々少しずつ増えてはいるが、国際水準からみるとまだまだ少ないというべきであろう。

パリに国際大学都市がある。1925年にフランス文化大臣の提唱によって、世界各国の学生や研究者に宿舍を提供し、文化や学術の交流を推進することを目的として建設されたものである。34ヘクタールの広大な敷地に40の建物が散在し、その中にはドイツ館、スイス館、イタリア館、スペイン館などとともに、薩摩治郎八の資金援助によってつくられた日本館もある。全体で130か国、5,500人の学生や研究者が居住している。こうした施設は学術研究や文化交流を側面から支援する大きな意義をもつもので、このような施設がさらに世界各地につくられることが期待される。

---

9 「研究者に占める女性割合の国際比較」『男女共同参画白書』平成27年版。



#### 4. 日本語教育

日本研究の基礎になるのは、日本語教育である。日本語学習者は、2012年現在、世界で398万5千人おり、年々増加の一途をたどっている<sup>10</sup>。最多は中国の104万6千人、次いでインドネシア87万2千人、さらに韓国84万人、オーストラリア29万7千人、台湾23万7千人、アメリカ15万6千人、タイ13万人と続いている。1990年頃のバブル経済の崩壊によって、日本経済の勢いが衰えたが、それでも日本語学習者の数は減らなかった。

大学で日本の経済や政治を学ぶ学生数は減ったが、一方でアニメやマンガ、Jポップなどに対する興味から日本研究を志す学生が増え、全体として日本語や日本学を学ぶ学生は、むしろ増加傾向を示している。欧米にはコスプレで大学に来る学生もいる。アニメやマンガに対する関心は世界的な傾向で、こうした方面に対する関心から、本格的な日本学、日本研究に入ってくるならば、歓迎すべきことであろう。ドイツやフランスでは、柔道や剣道、合気道など、日本のスポーツに対する関心も深い。

海外を歩いていると、日本の文化がいかに広く、また深く受け入れられているかに驚かされる。それは一般の日本人が想像する以上のものである。それは日本の文化が、世界に通用する普遍的な価値を持っているからに他ならない。

近年、国際語としての英語教育の重要性が声高に叫ばれている。もちろん現実の問題として、グローバル化した現代において、英語運用能力が重要であることは論を俟たないが、といって自国語を軽視してよいということにはなるまい。戦時中アメリカ陸軍の日本語学校で学んだハーバート・パッシンが、興味深いことを述べている。「私はいくつもの言語を話す、ある言語からある言語へと使う言語を変換すると、自分が人格も身振りも動作も、そして頭脳構造の枠組みまでも、それに合わせて姿を変えていくのがわかる。」「日本語を話すと、自分がこんなにも礼儀正しくなれるものと、自分でも驚いてしまう。」<sup>11</sup>というのである。言語とはそういうものである。日本語と日本文化は切り離すことが出来ないものであり、日本の文化を知ることによって、世界の人々の精神的な世界がより豊かになるものならば、英語を重視する一方で、日本語もますます広めていく必要があらう。

10 国際交流基金編『海外の日本語教育の現状——2012年度日本語教育機関調査より』くろしお出版、2013年。

11 ハーバート・パッシン『米陸軍日本語学校——日本との出会い』TBSブリタニカ、1981年



現に自国の文化を大切にしている国は、自国語の国際的普及に力を入れている。中国は国家プロジェクトとして、孔子学院を通じて中国語と中国文化の国際的普及を図っている。現地が施設を提供、中国側が講師を派遣し、資金と教材を提供するのである。2015年現在134か国で1,500校が課程が展開されている<sup>12</sup>。ドイツのゲーテ・インスティテュートは、ドイツ語教室を世界97か国に147か所持っている。またフランスのアリアンズ・フランセーズは世界138か国に1,085校のフランス語教室を設置している。英語については、世界各国で自主的に英語教育に力を入れているが、アメリカにも各地に無料の英会話教室があって、外国人に対する英語教育に力を入れている。

ところで海外での日本語教育担当者は日本人が多い。留学した者が現地人と結婚するなどしてその国に留まり、職業としては日本語教師を選ぶようになるケースがよくみられる。あるいは企業の駐在員夫人が日本語教師を志す場合もある。しかし、日本人なら誰でも日本語が教えられるというレベルでは、教育効率が悪い。日本語教員もきわめて高度な専門職なのであり、きちんとした知識と訓練が必要である。近年は海外の日本語教員養成制度も充実してきている。アメリカではウィスコンシン大学、コロンビア大学、コーネル大学、オハイオ州立大学などに、日本語教師養成コースやプログラムがある。

しかし欧米の大学では、日本語教員については多くが任期制をとっている。例えばドイツでは、州によっても異なるが、3年とか5年の任期制を採っている所が多く、5年以上は将来年金を支払わなければならなくなるから、州政府はなかなか契約したがないという。しかしそのようなやり方では、日本語教師は腰を落着けて仕事に取り組めず、ベテランが育ちににくいことが危惧される。

## 5. 日本関係図書

日本語の図書に関しては、アメリカの大学が充実している。アメリカでもっとも日本語図書が多いのはアメリカ議会図書館で、約121万5千冊を所蔵する。これは日本と同様、すべての印刷物は議会図書館に寄贈する義務があるから別格としても、カリフォルニア大学バークレー校約41万3千冊、ハーバード大学イェンチェン図書館約35万4千冊、コロンビア大学東アジア図書館約33万8千冊、ミシガン大学図書館約31万9千冊、イェール大学図書館約28万6千冊、シカゴ大学図書館約24万5千冊など、アメリカの大学は大量の日本語図書を所蔵している<sup>13</sup>。

12 孔子学院WEB。http://www.hanban.edu.cn/confuciousinstitutes/node\_10961.htm

13 東アジア図書館協会が公表している2015年度資料による。

そして多くの図書館では日本語、中国語、韓国語の図書を混合して配架している。

カリフォルニア大学（UC）バークレー校には、2007年に東アジアの図書だけを独立させたC・V・スター東アジア図書館が完成した。東アジアの図書のみで独立した建物を持っている大学図書館は他にないようである。C・V・スターが巨額の資金を提供、日本の仏教伝道協会も50万ドルを寄付した。コロンビア大学にもC・V・スター東アジア図書館がある。

UCバークレー校の日本語図書のうち約10万点は、版本と写本を主とする三井文庫本である。この図書館が出来て、約8割はここに収納できたが、それでも残りは2か所の保存図書館に別置されている。日本では収納スペースがないという理由で、多くの図書館では図書の寄贈を受け入れなくなっているが、ここではいったん受け入れて必要な本だけ残し、他は教職員に安く売るというやり方をしている。きわめて合理的で、日本でも参考にすべきであろう。

コロンビア大学のC・V・スター東アジア図書館には、同大学教授であったドナルド・キーン氏の寄贈になる、キーン氏が日本の作家から寄贈された著者サイン入りの本や、手紙のコレクションが大量に所蔵されている。ピッツバーグ大学東アジア図書館には、旧三井銀行金融経済研究所の所蔵本6万冊余りが、コーネル大学には、前田愛のコレクション約1万3千冊が、カリフォルニア大学バークレー校には、遠藤周作のコレクション約7千冊が、それぞれ寄贈されている。

世界の日本研究機関には、日本語図書を欲していても、予算がないために手に入らないところが多い。イタリアのある著名な大学でも、そのような悲痛な声を聞いた。それならば日本で引き取り手がない貴重な書籍を、そうした真に欲している所へ送れば、図書が生きるというものであろう。先方が送料を負担できれば問題はないが、それも難しい時には、日本の資金で送る方策はないものであろうか。

ほとんどの大学では、その膨大な資料の一部または大部分を遠隔地の保存書庫に収蔵している。その点、シカゴ大学図書館では、約24万5千冊の日本関係資料を1か所に集め、研究者や学生が実際に手に取ってみることができる。研究者や学生にとって、これだけの資料を目の当たりにする学問的刺激は非常に大きい。図書館は午前1時まで開いていて、利用者の便宜を図っている。

日本文学や日本史の研究では、前近代を対象にすると、写本や版本資料が必要となるが、アメリカには原資料がほとんどなく、日本に出向いて調査する必要がある。日本では国文学研究資料館がフィルムや紙焼写真を作成する業務をしているが、これをアメリカでも見るように、データベースの完全公開が

望ましい。

美術分野にはジャパン・アート・プロジェクトと呼ばれる事業がある。これは1995年に国際交流基金と国際文化交流推進協会の共催事業として始まったもので、現在は国立新美術館に引き継がれている。海外で入手困難な日本の展覧会のカタログを、海外の日本美術研究の拠点機関に寄贈する事業で、アメリカのフリーア美術館図書室、コロンビア大学エイヴリー建築・美術図書館、オランダのライデン大学東亜図書館、オーストラリアのシドニー大学フィッシャー図書館に贈られている。返礼として、寄贈先の各機関から、海外で開催された日本美術展覧会のカタログが送られてくる。日本にとっても海外機関にとっても、有意義な事業である。

ハーバード大学の東アジア研究図書館が、中国学を研究するイェンチン研究所から出発していることから窺えるように、アメリカのほとんどの大学で、蔵書数は中国語図書の方が、日本語図書よりも多い。それは中国研究の方が歴史が古く、スタッフも多かったからであるが、日本語図書よりも書物の単価が安いことも、その傾向を後押ししている。

アメリカのオハイオ州立大学には、マンガ研究図書館がある。日本のマンガ文化全体が概観できるようにと、広範囲な資料が集められ、マンガの原画を約30万枚、日本のマンガ本だけで2万冊以上を所蔵する。終戦直後に神田で購入した手塚治虫の1枚32万円する原画もある。

ドイツの大学は、アメリカとは対照的に、個々の大学がそれぞれに図書を所蔵するのではなく、国立図書館が集中的に図書を購入し、それを各大学の研究者が借用するシステムで運用している。送料は2ユーロで、4週間借りられる。早ければ3日で届く。時間や手間はかかるが、経済的には合理的といえる。ただ国立図書館の日本語図書の蔵書数は約23万冊で、大規模大学でも2～5万冊程度のところが多いから、アメリカの大学と規模の点では大差がある。

フランスのコレージュ・ド・フランスは、学生やキャンパスを持たない研究所組織で、50名余りの教授陣を擁している。この図書室は約3万冊の日本語図書を持っており、蔵書数そのものはアメリカの大学図書館などと比べると、多いとは言えないが、近世以前の本、原典や基礎的なものから購入するようにしているということで、本格的な研究態勢を志向する。古典文庫、時雨亭叢書、東洋文庫、大日本史料や古辞書類など、基礎的文献が整備されている。

## 6. 翻訳と出版

欧米では、欧米語を相互に翻訳しても学者の大きな業績にはならないということがある。翻訳料もきわめて安い。また、欧米語とは遠い日本語から欧米語への翻訳、あるいはその逆も業績としてはあまり評価されず、学問的評価に耐えようとすれば、その翻訳には詳細な注や解説が要求されることになる。したがって海外の日本研究者が、日本の作品を自国語へ翻訳することは簡単ではない。国際交流基金などが助成金を出した時に出版社が相談に乗ってくる、というのが現実である。翻訳出版事業への助成制度がどうしても必要である。

興味深いのは1993年から2000年にかけて、ベルリン自由大学のイルメラ・日地谷＝キルシュネライト教授の編纂によって、日本文学のドイツ語訳シリーズ「日本文庫」32冊がインゼル社から刊行された企画である。収録する作品や翻訳者の選定は、すべて同教授の手によって行われた。

『古今和歌集』『方丈記』のような古典から、夏目漱石『吾輩は猫である』、島崎藤村『破壊』などの近代の作品、森鷗外『普請中』、谷崎潤一郎『武州公秘話』、川端康成『浅草紅団』のような、すでにドイツ語で刊行されている著名な作品を避けて選ばれたもの、宇野千代『或る一人の女の話』、円地文子『女面』のような女流文学、また古井由吉『聖』、丸谷オ一『女ざかり』などドイツ語圏で初めて紹介された作家の作品、さらに西田幾多郎『禅の研究』、加藤周一『羊の歌』など、多様な作品が編者の見識によって選ばれている。全巻に詳細な解説が付され、ドイツ人読者の理解を助けている。

良質の翻訳を提供することにも、とりわけ意が用いられている。なかには何人かに試訳してもらい、3人目の訳がようやく採用されたケースもあるという。

こうした優れた編者による日本文学の叢書が、ドイツ人の日本文学に対する理解を深める上で、大きな力になるであろうことは、言うまでもない。

ベルリンの森鷗外記念館は、多数の日本の書物を独訳し、世界の大学など約120の機関に送っている。

文化庁は、文芸作品の優れた翻訳家を発掘し育成するために、2010年に第1回翻訳コンクールを実施した。第1回は英語とドイツ語が対象で、小説と評論・エッセイの課題作品各3点の中から1点ずつを選んで翻訳して審査を受けるのである。2015年には第2回のコンクールが行われたが、翻訳言語は英語のみであった。優れた翻訳者の発掘・育成という趣旨からすると、翻訳言語をもっと増やすべきであるし、毎年実施すべきであろう。

イタリアでは吉本ばなの本がよく読まれている。それは翻訳も優れているからだという。複数の研究者から原作以上だという評を聞いた。翻訳された作品が原作以上になることがあるのかどうかはともかく、それほど翻訳は大切だということである。川端康成や大江健三郎がノーベル賞を受けたのも、原作の良さに加え、翻訳も優れていたからであろう。

国文学研究資料館の伊藤鉄也教授の調査によると、『源氏物語』は33もの言語に翻訳されており、今や世界文学となっている<sup>14</sup>。英訳もアーサー・ウェーリー訳（1925年）を嚆矢として、現代英語によるサイデンステッカー訳、最新の源氏物語研究の成果も取り入れたロイヤル・タイラー訳などがあり、オスカー・ベンル教授のドイツ語訳、ルネ・シフェール教授のフランス語訳などと共に、名訳として評価が高い。一度訳された作品であっても、さらにより訳文をめざして、何度でも翻訳が試みられてよいであろう。

村上春樹の人気は世界各地で抜群である。ハーバード大学では、大学の書店で村上ものが書棚の1ブロックを10年以上前から占め続けている。2009年のカリフォルニア大学バークレー校における講演会では定員2,000人の会場が満席になり、入れない者も出た。ワシントンのジョージタウン大学では、ある年に村上春樹の『神の子どもたちはみな踊る』が、大学1年生全員1,200人に対し、課題図書として指定された。

もっとも、意外とも思われる作品がよく読まれているケースがある。吉川英治の『宮本武蔵』は、1,000ページに近い大冊であるが、アメリカで10万部以上出た。黒沢明の映画などの影響もあるかもしれないが、それ以上に剣の修業を通して自己を確立していく物語が、普遍的なテーマとしてアメリカの読者の心を捉えたのであろう。この作品はヨーロッパでもよく売れている。

## おわりに

さて以上、海外における日本研究の一端を垣間見てきたが、実地に多くの日本研究者の方々と懇談させていただくことが出来たことは、誠に有難いことであった。ただその成果を発表する段になって困惑したのは、現在の出版界の事情はきわめて厳しいものがあり、日本研究を主題とするような本を出してくれるところがないことであった。そのためアメリカにおける日本文化をテーマとする本を上梓した際にも、日本研究に割けるスペースは限られており、一部の研究者しか紹

14 伊藤鉄也「エスベラント訳『源氏物語』は33種類目の言語による翻訳」（同氏 WEB「鷺水亭より」）。

介できなかったことは、痛恨の思いであった。

海外での調査研究には多額の費用を要する。研究助成がまったく期待できない中で、こうした多額の費用を要する研究テーマを継続することは困難である。

そうした個人的な事情はともかく、海外の日本研究機関を歩いていて痛切に感じたのは、日本研究に対する助成が少なく、困難な状況にあるという各方面から上がる悲痛な声であった。国際交流基金も懸命に努力しているが、同基金の予算自体がもともと少ない上に、近年はかなり減額されており、事態が憂慮される。海外における日本研究の実情調査は、わが国の公的機関が十分な予算と人員を投入して、大規模かつ継続的に行うことが必要であろう。国の将来のためにも、学問研究や文化に必要な予算が充分確保されることを強く望むものである。